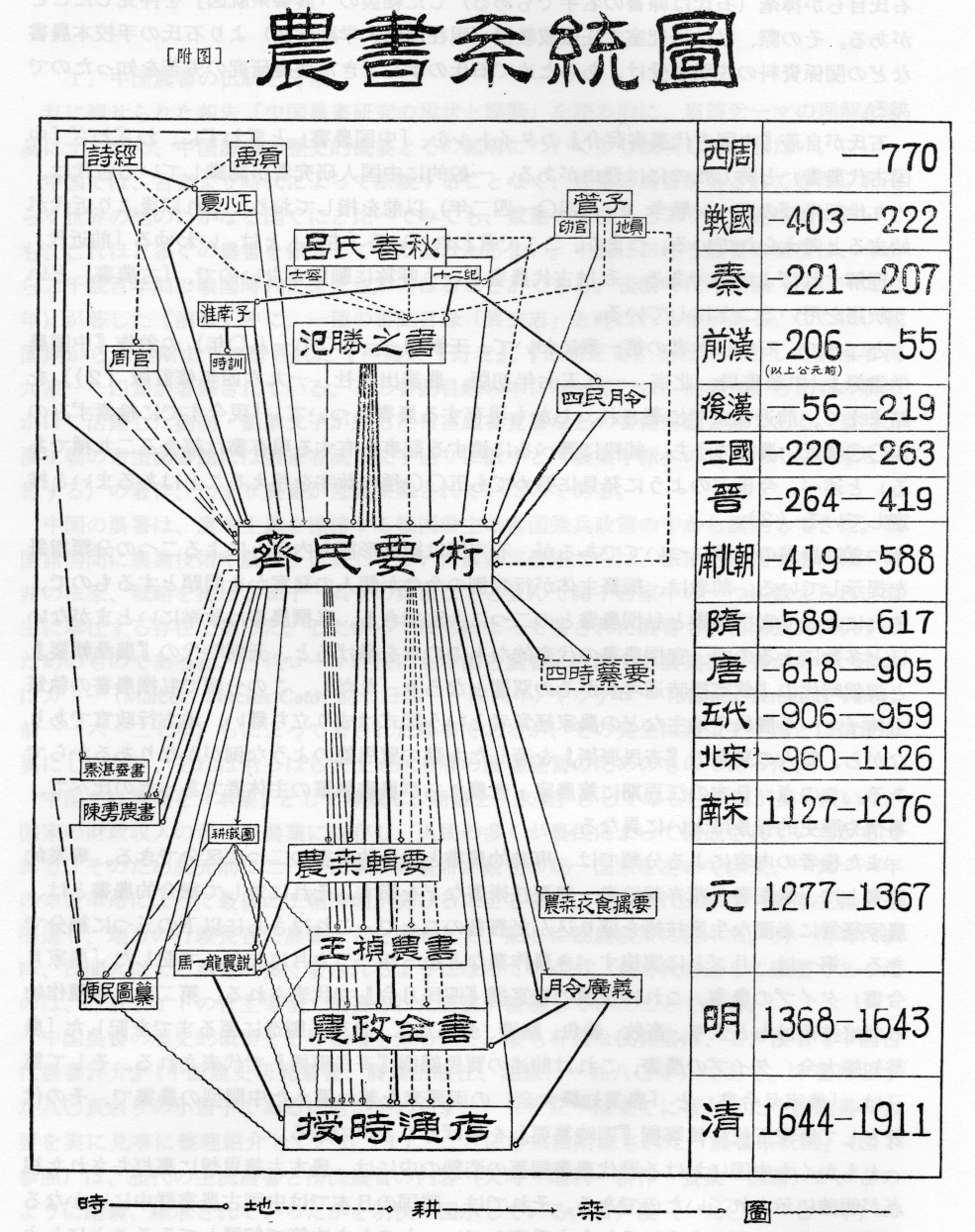
1. 「農書系統図」(石声漢『中国古代農業評介』、北京・北京農業出版社、1980)



②『尚書』「禹貢」からから該当部分抜粋　(読み下し、訳は、加藤常賢『書経』(『新釈漢文大系』)による)

冀州「厥土惟白壌\*。厥賦惟上上、錯。厥田惟中中。」

（厥(そ)の土は惟(こ)れ白壌なり。厥の賦(ふ)は惟れ上の上にして、錯(まじ)はる。厥の田は惟れ中の中なり。）

\*　訳「白色の柔土」、語釈：馬融註「壌転生和美也」、偽孔伝「「無塊曰壌」、説文「壌柔土也」

兗州「厥土黒墳\*。・・・厥田惟中下。厥賦貞作、・・・」

（厥の土は黒墳なり。・・・厥の田は惟れ中の下なり。厥の賦は作に貞(さだ)まり、・・・）

\* 訳「黒色で肥えた土」、語釈：馬融註「墳有膏肥也」 (墳コウは肥の意)

青洲「厥土惟白墳。・・・厥田惟上下。厥賦中上。」(略)

徐州「厥土惟赤埴墳\*。・・・厥田惟上中。厥賦中中。」(略)

\*訳「赤色の肥えた粘土」

揚州「厥土惟塗泥\*。厥田惟下下。厥賦下上、上錯。」(略)

\*訳「塗泥(水気が多い)である」、語釈：馬融註「塗泥漸洳也」(湿潤の意)

荊州「厥土惟塗泥。厥田惟下中。厥賦上下。」(略)

豫洲「厥土惟壌、下土墳壚\*。厥田惟上中。厥賦錯上中。」

（・・・下土は墳壚なり、・・・厥の賦は錯へて上の中なり）

\*訳「柔らかい土であるが、低い土地は黒色の堅土」、語釈：『尚書集注音疏』「壚黒剛土也」

梁州「厥土惟青黎\*。厥田惟下上。厥賦下中三錯。」

（・・・厥の賦は下の中にして三錯す\*\*）

\*　語釈：馬融註「黎小疎也」、訳「青色の疎土(ぼろぼろした土質)」

\*\*　訳「ならして下の中であるが［所により］その上下三級を雑えて出す」

雍州「厥土惟黄壌\*。厥田惟上上。厥賦中下。」(略)

　\*　訳「黄色の柔土」

③『管子』巻第十九地員五十八　(読み下し、訳は、遠藤哲夫『管子』(『新釈漢文大系』)による)

悉徒(しつと)\*　「悉徒、五種無不宜。」(悉徒は、五種\*\*宜しからざる無し。)

\*　語釈：「悉徒」は「悉土」に同じ、訳：沖積土地帯(地帯は不適、また沖積土は？) /　\*\*　黍(キビ)・稗・菽(豆)・麦・稲

赤壚(せきろ)\*　「赤壚歴橿肥。五種無不宜。」(赤壚は歴橿\*\*にして肥ゆ。五種無不宜。)

\*　赤黒い色の土地(訳、土地→土)/　\*\* さらさらしていて堅く(訳)

黄唐(こうとう) \*「黄唐無宜也。唯宜黍秫也」(黄唐は、宜しき無きなり。唯だ黍・秫に宜しきなり。)

\*　泥深い地帯(訳、同上)

斤(せき)埴\*「斤埴宜大菽與麥。」 (斤埴は大菽と麥に宜し。)

\*　赤色の粘土質の土地(訳、同上)

黒埴「黒埴宜稲麥。」(略)

上の土

粟土(ぞくど)「羣土之長、是唯五粟\*。五粟之物、或赤、或青、或白、或黒、或黄。五粟之状、淖而不□(靭)、剛而不觳」(羣土の長、是を五粟\*となす。五粟の物は、或いは赤し、或いは青く、或いは白く、或いは黒く、或いは黄なり。五粟の状は、淖(潤)にして□(靭)ならず、剛にして觳\*\*ならず。)

「乾而不挌、湛而不澤、無高下、葆澤以處。是謂粟土」(乾けども挌ならず、湛なれども澤けず、高下となく、澤を葆ちて以て處る。是を粟土と謂ふ。)

\*　黍・稗・菽・麦・稲 / \*\*　地味に富んでいる(訳)

沃土、「剽怵槖土、蟲易全處」(剽怵(ひょうじゅつ)にして槖(たく)土、蟲易全くして處る。) \*

\*　堅くこまかい土であり、虫が住みやすい(訳)

位土、「不塙不灰」(塙\*ならず灰ならず)

\*　堅土、石多き土(地)

隱土、「靑怵以肥、芬然若灰」(靑怵\*にして以て肥え、芬然\*\*として灰の若し。)

\*　青く密(訳)　/　\*\*　高く盛り上がって(訳)

壤土、「芬然若澤若屯土」(芬然として澤\*の若く屯土\*\*の若し。)

\*　しめる　/　\*\*　堆肥(訳)

浮土、「捍然如米、以葆澤不離不拆」(捍然として米の如し\*、澤を葆つを以て離れず拆(さ)けず。しかも湿潤さを保っているので、ばらばらに離れたり、裂け割れることがない。)

\*　細かく砕けていて米のように堅く(訳)

<以下略>

④『播磨風土記』

土の評価法は、上中下それぞれを上中下とする9段階で、『尚書』の方法を踏襲し、生産性のみによっている。播磨国10郡のうち「上」があるのは餝磨(しかま)（飾磨）、揖保、纘(さ)容(よ)（佐用）、賀毛［加古の北］、「中」のみは賀古（加古）、印南(いなみ)（高砂）、宍禾(そう)（宍粟）、神前（神崎）、美嚢(なぎ)［明石の北］、「下」のみは宍禾(そう)（宍粟）、託賀(たか)［神崎の東］で、今日の基本的な土性条件とほとんど変わりない。土性についての記載ない。

なお、物産の記載はあるが、ほとんどが地名の由来を説明するもので、課税目的とは考え難い。例えば、賀古郡「望理里。土中下。大帯日子天皇巡行之時・・・」、「鴨浪里。土中中。・・・耕此之野多種粟。故曰粟々里。・・・」。

⑤『會津農書』

黄真土　1升\*当520匁　(仮比重\*\*0.993kg/cm3) 、黒真土 510 (0.974)、白真土 500 (0.955)

沙真土 490 (0.936)、野真土 480 (0.916)、徒真土 440 (0.840)、沙土 480 (0.916)、野土 430 (0.821)、徒土 370 (0.706)

\*「四寸九分四方、深二寸七分」(京枡)＝196.4 cm3　/　\*\*耕地にある状態で採取した容積当たりの乾燥重量。

⑥『百姓伝記』

(第6段)「青赤木白黒の上土をわかつ事」

「黄色なるねバりなき、地ふかき宝土を一番と定めよ。稲子地に似たり。万木諸草能生しそだつ。五穀ミのる事、・・・」

「白色なるねばりなき、地ふかき宝土を二番と定めよ。黄色真土の次也。」

「赤色なるねバりなき、地ふかき宝土を三番と定めよ。真性地なるゆへに、万木諸草能生付安し。」

「青色なるねバりなき、地ふかき宝土を四番と定めよ。万木諸草よく付、そたつといへとも厚味なし。真土のうちの不性地也。」

「黒色なるねバりなき、地ふかき宝土を五番と定めよ。黒ぶく土に似たり。」

(第7段)「青赤木白黒のねはり真土の事」

「青赤木白黒のねバ土は何も真性なれとも、善悪の次第あり。一番に黄色土、二番に白色土、三番に赤色土、四番に青色土、五番に黒色土、万木諸草の生付そたち、順々色を論することくなり。」

(第8段)「青赤木白黒の小砂地の事」・・・(以下略)

⑦『勧農固本録』

「土地位付幷作物仕付様之事」9段目から。

「・・・東高く西低き地は早稲満作也、西高東低地は晩稲満作なり、・・・」

「砂眞土、白眞土、黒眞土、赤眞土、鼠眞土、大河ごみ、稲子眞土、野土交眞土、右は上の田畑成べし、総て重く和く成る土を上とす。さく石交眞土、砂の過ぐる眞土、小石交白眞土、黒く重き野土、砂の過ぎたる大河ごみ、中たるみの山畑、右は中の田畑成べし。ねばき赤土、強きねば土、強黒眞土、砂交野土、輕赤土、灰土、輕野土、青まさ土、砂計の畑土、右は下の田畑成べし。

その他にも、用語或いは言い回しから推測できる。

「淤泥干て重きは上也・・・」(6段目)、「黒土は麥に宜、赤土は豆に宜、粟黍は木白土の肥地に宜し」(8段目)

「汚泉は稲に宜とて村里の垢水野流入が吉。」」(12段目)、など

⑧『土性弁』

壌土は俗に「ハラ、キツチ」と云ふ是也、此土は銕(くろがね)の銹腐れたる粉末に滑石、白亜、雄黄、石脂、代赭石、火石、水晶、磁石、乾漆等を混し、且硫黄、礬石、(石+歯)砂、焔硝等の氣を含蓄する。・・・

白壌　壌土中第一等　・・・　古代には黄壌を第一等としたる者なれとも、予多年精究するに、白壌は黄壌よりも秒量の重く、畑とするも水田にするも、其実を結ふこと極て多し・・・禹貢云、冀州厥土惟白壌、厥賦惟上の上と

記したるを視ても・・・黄壌は土の正色たるを以て、黄壌を上とするの節は五行の色相に感(まど)びたるなり・・・

黄壌　壌土中第二等　・・・古へは土性を辦する未た精しからす、五行家にて黄壌を第一の土性とせり、其説固より取に足らす、禹貢云、雍州厥土惟黄壌、厥田惟上々厥賦中下、と是也・・・

⑨　土壌生成分類学への投影

表1　土壌の粒径区分

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | | 2 | |  | 0.05 | | 0.02 | | 0.01 | | 0.002 | |  |
| 国際土壌学会法 | 礫 | | 砂 | | | | | シルト | | | | 粘土 | |
| USDA法 (米) | 礫 | | 砂 | | | シルト | | | | | | 粘土 | |
| 日本農学会法 | 礫 | | 砂 | | | | | | | 粘土 | | | |

表2　土性区分(日本農学会法)　 土性(texture)の定義：粒径組織に基づく土壌の類別

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 土　性 | 砂土 | 砂壌土 | 壌土 | 埴壌土 | 埴土 |
| 粘土含有量(%) | 12.5以下 | 12.5～25.0 | 25.0～37.5 | 37.5～50.0 | 50.0以上 |

0

0

0

100

100

100

砂土

埴土

シルト

重埴土

軽埴土

埴壌土

ｼﾙﾄ質埴壌土

壌土

砂壌土

ｼﾙﾄ質壌土

砂土

壌質砂土

砂質埴土

砂質埴壌土

シルト質埴土

図1　三角図法による土性区分

(国際土壌学会法)

山疑路

真疑路

真土\*

(砂真土)

油音土

風音土

紫狐真土

ねば土

野土

ねば真土

沙真土

野真土

真土

へな土

真土

＊

徒土

沙土

＊

小砂地

＊徒真土

＊左から、白真土、紫真土、黒真土

＊真土に小砂まじり

真土：壌土及び埴土と推定

図3 『會津農書』同

図2 『清良記』土性分類の三角図法表示

図4 『百姓伝記』同